

## 座談会：岡田武松先生を偲んで (II)

### IV 和達清夫氏の話

#### 1. 岡田先生の初印象

大正14年1月卒業を間近かに控え、気象台に就職することに内定した大学生3人、小平、川野(昌美、元仁川気象台長)、和達が、震災後のバラック建の狭い予報作業室の一隅にある藤原先生(当時、東大理学部教授兼任)の机を囲んで教えを受けていたとき、岡田台長が室に入って来られ、そこで挨拶をしたのが、私の先生にお目にかかった最初。先生はあごひげをはやされ、相当のおとしに見えたが、考えて見ると先生は52才であられた。みなりもかまわず、室に立ったまま2時間くらい、私たちを前にして、学界のこと気象台のことつぎつぎ、冬の日がとっぷり暮れるまで話をされた。仕事に情熱を傾けた学者らしい方との第一印象をうけ、私たちは卒業して気象台で働くことに大きな希望を抱いた。

#### 2. 食堂において

当時の中央気象台は(大正の終りから昭和のごく初め)バラック建が5棟あり、本庁舎、予報関係、工場、養成所、それに会議室であった。その会議室で毎日昼食をとった。食事は宝亭の洋食べんとう、後にさらしなのそばとなる。新着書籍雑誌はここで見られた。食後3、40分が岡田先生を中心とした座談会で、台内の打合せも大半はここで行われた。(したがってその頃台内の会議と云うのはほとんどなかった。)この食堂が私には岡田先生を偲ぶ第1番のものである。その話題のうち印象に深い言葉を少し上げて見ると

- i) 外国人の尻馬にのるな(研究のこと)。
- ii) だらきう。(仕事をするのにチャンスが来たらぐっとしめることの大切を力説、だらだら急の略)
- iii) 8円の子(当時人件費を節約のため、安い月給の給仕を使って間に合わせることを戒められた。8円は当時の月給にしても安すぎるが、10円くらいが田舎にはあった由。)
- iv) 男のやきもち。(大いに事業をすると、他人のしっとを買うものであるから戒心の大切なこと。これに附ずいしてジャーナリズムで名を売ると、これもしっとされる原因となると戒められたこと。)
- v) 二一天作(あまり物を割り切らぬこと、りくつばらぬこと、二一天作すぎると云う戒めの言葉)
- vi) じわじわ(クロノメーターのねじを巻く形容から器械を丁寧な扱うこと)
- vii) 水中のおなら(仕事を積極的にしないこと、ほ

とんど論文も書かないこと)

などであるが、要するにユーモアをまじえて、台員をこぶげきれい、戒めなどされた。そして同じ話をくり返された。

#### 3. 雑誌会や学会のこと

この食堂は毎週の雑誌会、また毎月の気象学会の会合室であった。当時のメンバー藤原、小野、築地、佐々木、佐藤(順)、梶間、山田(琢雄)、田代、鷺坂、(後に関口)(大正14年に私達3人、それから逐年、日高、国富、中野、西村、岡田(群)、養成所卒業生と新進が加わった)等の先輩がほとんど常に出席された。最も議論のあったのは、小野、中野両博士の論争で、そんな時岡田先生はいつも微笑して聞いて居られた。この雰囲気は全く寺田先生が梁山泊と評されたところの岡田とその一党と云うべきものであった。

#### 4.

大正の終り頃は中央気象台の人員は100人くらいで、課はなく、庶務、予報、電信、統計、検定、地震、航空気象、図書などの係があった。藤原先生は予報主任だった。岡田先生は少くとも1日に1度は台内を廻られると云ってよかった。ことに出勤時刻少し前の時刻にそれをされた。私が出勤して見ると、私の椅子に腰かけて室のものど談笑されているのできまりが悪い思いをしたことがしばしばある。

#### 5. 地震観測網の整備

関東大地震で、東大には地震研究所が出来た。これに対応して、中央気象台では大正十四年に全国に二十カ所の地震観測所の整備強化が行われた。これが日本の地震学会の中期の発展の基礎をなしたものであると思う。先生はウィーヘルト 200kgの水平上下両成分と大森式地動計及び簡単微動計、それに地震計室を建てられた。当時としては日本の国情に適した器械であり、現在では学問の進歩とともに地震観測網の再検討が加えられているが、この整備は日本の学界に対して大きな意義を与えたものであった。

#### 6. 気象技術官養成所のこと

わが国気象事業の発展は昭和の初めから戦争にかけて最も著しいものであるが、その大きな要素をなしたのは中堅職員の活躍であろう。それらの人たちは、技術官養成所の本科、専修科などの卒業生であり、また同所で講習を受けた人たちの働きが気象台の発展に大きな力となっている。気象台内にこのような養成機関を設けたこと

は、確かに岡田台長の達識であると思う。しかもこの機関には粒揃いの秀れた若人が集り、適切な教育方針で、立派な気象技術者に成長した。

学問も高い所まで教え、しかも事業を行う精神面も十分に配慮された教育である。岡田先生のくんとうは実によくしんじゅんしたと思う。家族主義的とも云えるし、内弟的の教育方針であった。私が入台してまもなくあった養成所本科第一回生の卒業式に当って、岡田先生の訓辞の一節を今なおよく覚えている。

「気象の仕事をするに当って、学問や仕事に打ちこむことは大切であるが他の人に迷惑をかけるようなことをしてはいけない。夫婦仲のよいことは大いに宜しいが人の前もかまわずというのでは他が迷惑をする……」と云ったようなものであった（笑聲）。この型破りの訓辞に講師も卒業生も破顔一笑する情景に、この養成所の特色はあらわれていたように思う。時代もこういうときであったが、岡田先生の人をひきつける人格がこの養成所の根幹をなしていたのである。

### 7. 気象協議会のこと

測候所が府県に属しているときから、年一回台内気象官署長、府県の測候所長などが集り気象協議会などがあつた。議長は築地宜雄先生がきまりであった。この協議会の情景を見るに、殆んど岡田台長の中心の会であり、岡田台長の抱負や技術指導が、気象従業者にしみとおる会であったと言える。私の記憶で印象深いのは、神戸の堀口先生、高層の大石先生、台湾の近藤氏、仁川の後藤氏、上海の重富氏、銚子の前田氏、水戸の宇野氏、前橋の赤井氏、大阪の前田氏、長崎の中村氏、大分の山川氏、鹿児島丸岡氏、福岡の池上氏、高松の鹿田氏、横浜の高木氏、新潟の佐々木氏、熊谷の平野氏、彦根の筒井氏、沼津の金田氏、石垣の岩崎氏、高山の山沢氏、和歌山の田口氏、高知の赤松氏、盛岡の福井氏、などの方々である。この人たちが事業の中心である岡田先生を偲んでのなごやかな気象界の風景は、今日の気象事業につながっているものを覚える。

### 8. 中央気象台の器械修理工場のこと

岡田先生は、気象台における器械工場の重要性を認められ、当時の気象台としては不似合とも云うべき整った工場を持ち、よい工作者をそろえておられた。また御自身非常な趣味をもっておられた。岡田群司さんを、スイスに留学させたりしてこの方面のエキスパートに育て上げられたのであろうが、当時の気象台で工作技術を大切にしたことにもよる。後に神戸の海洋気象台に経線儀製作施設を整えたことや、また現在に到るも気象官署に、大なり小なり工作機械を整えている所の多いこと、また養成所の課程にも、工場実習を加えられたのもみな岡田先生のこの趣旨から出たものである。換言すれば、気象技術者にとって器械に対する知識と、とり扱い技術と、

それに簡単な修理ということは絶対必要なことであるという観点に立たれたものである。現在 ready made の複雑な器械が多く使われ、スイッチを入れればそれでよいという風潮が、器械取扱者にややともすれば多いのに鑑みて、気象官署ではいままお岡田先生の精神が残っているのは有難いことである。

### 10. 地磁気観測所のこと

岡田先生は気象台で地球物理関係業務一切をやる、しかも外国に劣らない立派なものにしようという熱意は大きかった。地磁気は田中館先生の熱意にも応えておられたものである。柿岡は、大正末期には、本線から三里の山奥で交通にバスはあると言ひ条、実さいには大した役にも立たず多く歩かねばならない不便の所であった。ここへ岡田先生はよく歩いて行かれた。国富さんもこの仕事を御一緒はかなりなさったものである。今日柿岡の観測所があのように立派に整備されて来たのを見ると岡田先生が一步一步建設されて来たあとを見るようで懐かしい、余談であるが、岡田先生の仕事のなされ方は、機会を逃さず一步一步拵けて行くやり方で、大きな計画を持って、長年待っていて一挙解決というやり方はむしろ少なかったようである。柿岡の観測所は地磁気観測所として今日世界一流であると思うが、このような淋しい所に、高い技術を要する施設を作ること、というよりそれを運営して行くことは岡田先生の最も苦心されたところである。今道先輩をドイツに送ってこの観測所の中心の技術者としてしようとされた意気は、当時としては先生の高い着眼によるものである。今道先輩は先生の意に応じて、今日の柿岡を築き上げられたことは深い敬意を払うとともに岡田先生の計画と後ろ立てとしての大きな力は、わが国の地磁気業務を見事結実させられたものと云える。

### 10. 海洋気象台、海洋観測業務及び海洋観測船のこと

岡田先生が、船舶の気象観測通報の仕事の世界にさきがけて、日本で行われたことは有名であるが、日本のような島国で、大きな海を控えている国では、当然とは云いながら、さすがに岡田先生らしい着眼と実行力とであると思う。そして、海洋観測と Physical Oceanography の開拓へと進まれた。神戸の海洋気象台が単なる海上気象台だけでなく、海洋学の分野にまで進み、双方車の両輪の如く海洋気象台の業務となった点は、わが国海洋学の開拓と進歩とに対する一形式を作ったのである。日本の海洋学が応用面からの発達とは別に、学問それ自身からの発達となったのは岡田先生の功績であろう。海洋学者を気象台系統から多く出したのは、岡田スクールが地球物理学一般を含んでいたから当然であるが、その学者達の理解と encouragement は岡田先生にして始めてなし

得たと見てよい。

岡田先生は船が非常に好きであった。旅行も汽車より船を好まれた。船への愛着とか理解とかいうか、それが気象台が船を持つところに進んだ。春風丸はわが国海洋学のれいめい期に、大きな役割を果たした。しかもこれに加えて千トンという大きい船が、凌風丸のことであるが、気象事業に必要なものであるということを当局に理解させ建造されたことは、実に岡田先生の船への熱意が実現したものである。凌風丸は海洋観測はもちろんであるが、むしろ、離島僻地への補給のこともあり、また時には今日の定点に近いような役割もし得る構想のもとに建造された。凌風丸建造時には海洋観測船としては大型すぎて使い難いという、海洋学者の声もあったが現在のように大洋に遠く出てこみいった科学調査を行う時代になって見ると、1000トンという大きさはむしろ恰好なものであったとさえ言えるのである。

日本の海洋学における貢献者として、岡田先生の名を逸することは出来ないものであり、初代の日本海洋学会会長であられたことも当然と言えよう。

### 11. 気象官署国営のこと

今日気象事業は国営に一元化されているが昭和十四年まで、測候所が各府県所属のものであったことは周知の通りである。これは当時としては非常に大きな改革の大事業というべきである。これが実現されたのは、航空の発達と当時の国際情勢のきんぱく化にも関係するが、また岡田先生が一步一步その基礎を固めていったことにある。まず離島岬角へ附属観測所を設け、次ぎに航空測候所を航空路にそって設け、そして大阪、福岡、三島などに気象台の支台を設けたことである。三島支台が昭和4年、大阪及び福岡が昭和5年であるから十年近くも支台と測候所と同じ場所に存在しているというのである。そして福岡などは、大阪測候所、雁の巣の航空測候所と福岡測候所が独立にあったという有様で今日の眼から見ると様子が大分ちがっている。もっとも理想である国営一元化の大計画は、胸に画きつつ、実さい計画をすすめる場合には、大計画を陽に樹立するのではなく、可能のところからじわじわと計画をすすめるという点は岡田先生独得のやり方であったと思う。もっとも測候所の国営移管の一挙実現については当時昭和十二年頃の情勢すなわち軍部との関係によることも大きく作用したのはもちろんである。

### 12. 室戸台風と災害科学研究所

室戸台風は未曾有の大被害をもたらし、国を震撼させた猛台風であったが、実に、わが国気象界をも、ゆずぶり奮起せしめたものであった。日本の気象事業は室戸台風によって新しいスタートを切ったと云っても過言でない。従来とも気象事業は、災害防止、産業の興隆に結び

つく社会へのサービス業務であるという観念は気象従業者にあったが、この台風によって気象人の任務はきびしいものであることが、誰の胸にも強く刻まれた。それまで何度か云われても実現しなかった零時の天気図も当然作るべきであり、なお、気象業務は24時間休みなく行われ防災の第一陣の任務を果さねばならないことが、はっきり結論された。室戸台風以後、防災ということが気象台の第一任務であることも今更のように認識され、予報業務はもちろん観測業務にも徹底的の改善手段がとられるようになった。岡田先生が室戸台風を契機として日本気象事業を再出発すべく意を用いられたこと（当時はまだ全国国営でなかったにせよ）を述べることは私よりもっと適当な方があると思う。室戸台風の災に鑑みて、日本学術振興会が防災科学に乗り出し昭和十一年災害科学研究所を関西に設立することとなったとき、岡田先生はその議に預り重要人物として、同研究所の設立に尽力された。先生が防災に気象台が真に力を入れるべ、この研究所に対しても強い熱意を示された。このため私、川野、川瀬、坂田君らを大阪に送られ後に伊東（疆）、三宅、守田君らをもって強化された。私たちは先生の防災への熱意を受けついでただ何とか仕事をしたいと一同若い血潮を燃やしたことは今も忘れられぬ思い出である。

災害科学研究所は所長が阪大総長楠本長三郎博士、第一部と第二部とがあって、第一部は当時の中央気象台大阪支台、第二部が大阪大学工学部の担当で、部長はそれぞれ私と工学部長鉛先生であった。私のことで恐縮ながら、私が三十台の若輩でありながら、大先輩とまじってこの仕事の責任ある位置を与えられたことは、私にとっては不安もあったが大きな感激であり、出来るだけ働いて岡田先生の知遇にむくいたいというのが、在任中いつも私の頭を支配していた。

### 13. 戦後のこと

岡田先生は戦後中央気象台の岡田研究室に始めは毎日のように見えていたが、後に柏の研修所の方が多くなり、そこで数学や気象学の講義をもって下さった。ことにその頃著述の執筆もされていて、気象の本の著述と気象技術者の育成に専ら力を注がれた。齢七十を過ぎてなお、はげしい情熱を持って研修所においでになったことは、若い学徒をどの位喜ばせ奮い立たせたか分らない。

先生は、戦後の社会情勢をよく認識された。アメリカの占領下における気象事業についても、その事態において最善を尽す道をとかれ、無理をしたり、強がりをすることを戒められた。

先生は、中央気象台が気象庁となることを非常に喜ばれた。亡くなられる一カ月ほど前に枕もとに伺ったとき、気象庁になれてほんとうによかった。これからは国際会議で、名実共に日本気象機関の代表であると云えるだろうと喜んでおられた。先生は殆んど自宅に籠って居ら

れたときも新しい時代の気象事業というものについての理解の深いこと、すなわち時勢を洞察される達識には私の非常に敬服するところである。

#### 14. 外国における名声

先生の外国における名声は高いものであった。

台風シンポジウムるとき来日した台湾の気象台長張氏も、そのとき先生にお目にかかりたいと布佐のお宅を訪ねた。先生の亡くなった知らせについて世界的に大きな貢献をした秀でた気象学者にして気象のオーガーナイザーである先生の逝去を、惜しみ哀悼の辞を送って来たのは、

中国、インド、ドイツ、オランダ、カナダ、フランス、スイス、ベルギー、アメリカ

の多数にのぼる、ここにその一つを記すことにする。

拜啓

岡田博士の死去を通知された1956年9月24日付の貴簡を深い悲しみのうちに拝見しました。

氏の偉大な学識と親切で温雅な性格は氏の名前を全世界に知らしめました。貴国の気象事業のみならず世界気象機関はスオボダ博士の死に続いて再び大きな損失を受けました。当国においては、岡田博士は、日本の気候に関する数多くの科学論文とIMOの専門委員会における協力によって広く知られております。

私は私自身の名において、また当機関に代って深い弔意を表するとともに、岡田博士が永く我々の記憶に残ることと信じます。 敬具

1956年10月5日 ドイツ気象局 ベル博士  
気象庁長官 和達清夫博士

#### V 大谷東平氏の話

すでに諸先輩の話でつきていて、私の述べるようなことはないのだが、落穂を拾って二、三のお話を申し上げる。私達の体の中には岡田先生が入っているといってもよいほど私達は岡田先生の影響をうけている。なかでも先生の大家族主義は私達の印象に残っている。今の世の中で「大家族主義」というといろいろと誤解される点もあるが、先生は気象界を本当の家のように考えられていた。先生は職員の上のことだけではなく、その家族のことまでも、たとえば某の子供さんはもう学校の何年になるとか、あるいはその家計のことまでもよく御存知になっていて、これを仕事の上にも常に考えておいでになった。岡田先生の人事には「否や」をいうものがなかったのは、すべてこうした先生の深い家族的な思いやりが裏付になっていたためであろうと考える。

また先生は下働きの人のことを卑下するようなことはなかった。一般に使われている「小使部屋」という言葉も先生はとくに「湯呑所」といわれたし、春、秋には下働きの人達をどこかに連れていかれて慰労されるのを常

とした。たしかこの催しを清遊会といったと記憶している。また長老に対する礼が非常にあつく、気象協議会の後などには必ず近郊の長老を御招待になって、昔話をして慰労された。今日のような民主化された時代ならともかく、当時のような官吏の権力が強かった時代に、このように気をつかわれて人に接しられたということは、敬服に値すると思う。

人を使う場合には、その人その人に応じて、ある仕事の範囲は完全にその人におまかせになった。しかしその範囲を越えると、ピシャリとブレーキをおかけになった。たとえば私には逓信省（これは先ほどの話にもあったように鉄塔の件で非常に難かしい交渉相手であったが）関係の交渉を全然まかせられた。また太平洋戦争の始まる前には軍との交渉がいろいろあったが、海軍に関することは私にすべてまかせられた。しかし陸軍との交渉になると私はすぐに喧嘩をしてくるので、たしか畠山さんが主になっておやりになった。このように先生はよく相手も見また当人もみて、人をお使になった。

開戦前のことについてお話しすると、岡田先生がやめられたのは、開戦已むなしと御承知になった時ではあったけれども、決して岡田先生は戦争をさけておやめになったのではなかった。先生がやめられた直接の動機は、先生が抱えておられた気象台のあり方というものをも軍によってまげられたと思われたからである。すなわち先生は日本の気象事業は気象台がやるべきであるとの信念を持っておられたが、当時陸軍の勢力が強くなってくると、気象電報を陸軍の方へもよこせとやってきた。つまり気象解析中枢を日本に2つおくことになるわけだがこれは岡田先生の信念とは相容れないものであった。この要求に対して岡田先生や藤原先生はレジスタンスされて、なかなかその要求を容れようとはされなかったが、最後にどうしても陸軍に気象専用線を分線しなければならぬことになった。その時私は岡田先生の所に参って「先生もう駄目です」と申し上げた。先生がお辞めになる決心をされたのは、既にこの時なのであって、間もなく先生は気象台を去られた。

以上先生の大家族主義と、気象台の枯節を最後まで守ろうとされたことは、とくに私の印象に残っている所である。

#### VI 佃十吉氏の話

東京の震災の時、中央気象台が焼けてしまって、天気予報の仕事ができない。逓信省から神戸の海洋気象台の方へ「気象電報がたまって仕方がないから、神戸の方で中央の仕事をやってもらえないか」との話があった。当時の神戸の台長は堀口さんであったが、たまたま外遊中であり、次席の関口さんは東京の罹災現場の方へ行かれています。したがって私がその時の前任という形になっていた。この申出に対して、私なども天気図は東京で多少

見習った程度でよくわからない。しかし幸に当時神戸には平野君、田口君というような人達がいたので天気図はまず描ける。また電報は（当時は20～30通であったが）托送電話で受けて見たが能率が悪いので、これを電信に切りかえなければならぬ。そこで電信の方は中央气象台からきた吉川君、高山君、それに有線の経験のある中野さんをお願いし、とにかく神戸で中央の天気予報の仕事 시작했다。

これに対して岡田先生は非常にお怒りになったそうである。しかしその後しばらくして藤原先生が神戸にお出でになった時「岡田先生はお怒りになったが、とにかく神戸でやってくれたので今回の天気予報は中絶せずに出せた。よくやってくれた」とのお話があった。その後奥山さんも見えて非常に感謝された。また岡田先生もしばらくして神戸にこられた時には、よくやったと言って下さいました。この代理の仕事は、2～3カ月ではあったが、とに角、神戸の海洋气象台ができていたから、仕事が中絶しないですんだ。

万一東京に今後震災の時のようなことがあって、天気予報の仕事ができなくなった時にはどうするかということも考えておくべき問題かと思う。

### VII 安藤広太郎氏の話\*

自分は農学をやったものである。気象庁の方々に対して、自分は气象台のエトランジェーであるが、もともと气象台とは縁が深かった。西ヶ原農事試験場では古くから気象観測をしていたが、これは中央气象台に報告することになっていた。岡田先生とは親しくなってから今年で丁度50年になるが、その始まりは明治39年のことである。この前年38年は凶冷の年であり、39年には4月に大霜害が起ったので、農商務局長桜井氏のすすめもあって農業と気象の関係者で研究会をやることになった。測候所からも出席者があったが、中央气象台からは岡田博士に来ていただいた。当時は霜害の原因については凍った樹木が急にとけて起るのだという、今から考えると荒唐無稽のドイツのザックスの説が行われていた時代であった。自分は当時の農事試験場の場長の古在博士を動かして、岡田博士に年100円の謝礼で囑託にきてもらおうと共に、当時の物理学校卒業生のうち優秀なものを観測者として傭に世話してもらった。岡田博士は自記の器機を使うことを勧められたが、当時5.60円であったが仲々買うことはむずかしかった。しかし古在先生が買ってよいだろうというので、湿度と気温を自記としたが、100円以上かかった。その後日射計も買ったが、風力計はなかった。当時は電気のない時代であったから、なかなかとりつけにくかった。しかし岡田先生が囑託として来るようになってからは風力計もとりつけ、結局岡田先生の世話

で観測は測候所なみとなったのである。

自分にとっては岡田先生は気象学の先生であったばかりでなく、数学の先生でもあった。当時農科の教課目には数学はなく、数学の程度は高等学校でやった程度であった。その頃は「高等学校で数学のきらいな者は農科へ行け」といわれていた時代である。自分は岡田先生に微積分を学ぶように言われた。また品種改良の問題に相関係数を使った論文もあったが、数学がわからないのであまり理解されなかった。自分は岡田先生に教わって、Yuleの Introduction to the study of statisticsをやったが、これを理解するのにメロズ(?)の Higher Mathematicsをやれと言われて之を勉強したが、自分は不可解の点は岡田先生に教わり、その代りに自分は内地の農業のことを教えた。

その後岡田先生とは50年にわたって交際したが、家族的にも親しかった。

岡田先生はまた予算をとることの名人であった。气象台の産業気象課が出来たのは、大正6年の台風がきっかけとなっている。この台風は東京の北を通り、被害のひどかったのは静岡県沿岸地方と東京では州崎の先のところ、そのため高潮のための防潮堤の問題が起った。時の文部大臣岡田良平氏と岡田先生は交渉することになったが、古在場長は岡田文部大臣をよく知っていたので、傍からくどくことをたのまれた。岡田先生は大臣のところに行って、タライの中に水を入れてゆすぶると、縁をこえて水のこぼれるアナロジーで説明した。結局文部大臣はタライのアナロジーで口説きおとされ、これが産業気象課の発端となったのである。

岡田先生は色々な本を買うことをすすめられたが、最初買ったのは Met. Zeit で、古在先生がライブチャットの本屋に注文して、これはこん度の戦争前までとっていた。また明治40年から寺田先生が来るようになったが寺田先生は Annalen der Physik をとるようにすすめた。その後岡先生はコント・ランジュをとるように言われた。

気象器械としては、その後太陽熱がもとだからというので、それを測るのにオングストロームの日射計を買ったが、1台だとこわれるというので、2台買った。これがもとで気象の部屋をつくることになり、ガルバノメーターを使い熱電対で温度の測定をしたりした。自分はこれを使って植物の凍結の研究をした。

岡田先生はまた非常に親切な人であった。自分が学士院会員になったとき、自分のところにとんできて、よかった、よかったとよろこんでくれた。

このように日本で農学に気象をとり入れたのは岡田先生が初めてである。また日本で農学に数学を導入したのは自分であると思っているが、その自分に数学を教えたのは岡田先生であって、この点でも大先達である。週日自分は天皇陛下の左側に座をしめ御陪食の光栄によくしたが、陛下には近時農学に数学の導入されることが盛んで

\* 第2部で話されたものを根本順吉氏がまとめたものである。

あることをのべられた。自分としては岡田先生に教をうけたものとして感慨無量のものがある。

（安藤博士は加茂儀一教授の後をうけ、さらに補足的に岡田先生と陸軍との関係について述べられた。その要旨は大体次のようである）。

満洲に中央气象台をつくる時のこと、航空関係の将校は岡田は悪いやつだといった。自分はどが悪いのかと言って反対したが、彼等は、岡田は陸軍のやることは何でもチャチを入れる、と言った。

自分は内地に帰ってから岡田先生の解説をとくために兵備局長の所に行って話をしたが、原因は岡田先生のところで、書類がフリー・パスしないことにあった。当時陸軍部内では位が同じ、たとえば大佐と大佐となら話が通じたが、大佐と大尉とでは話が通じなかった。陸軍から气象台に来るのは下役の人だったので、气象台長と対等に話が通ぜず、このため下役の人々はハンコがないのに協定ずみにしてしまっていた。そのような書類を作るので岡田先生はつむじをまげられ話が通じなくなってしまうのである。

後に殺された永田鉄山兵備局長とよく話がついたので、气象台のことは結局、岡田にたのむということになったのである。

## VIII 曾我義徳氏の話\*

### 1. 気象無線通信網の拡充整備

神戸海洋气象台の創設以前海岸無線局を中介して海上船舶からの気象電報、中央气象台からは警報の通報が開始されていた事は、海洋日本として世界に魁したものであったが、同台から始めて斬新式「プールゼンアーク」式及び「クェンチドスパーク」式発振器を以て、内外の海上船舶に航行安全のため、気象実況報及び警報の直接通報を開始せらるる事になったのも、世界に魁したもので特筆に値するものでありました。

次いで関東大震災後中央气象台からも、もっと広汎に亘る気象実況報と気象警報を、当時最新式の1「キロワット」真空管発振機を主装置とし、「プールゼンアーク」式を予備装置として通報せらるる事になった。その通達距離は速く濠洲方面及び米国西海岸地方までも達する偉力を發揮するに到り、航行の安全上甚大なる効果をもたらしたものとして絶讃せられた。当時1「キロワット」以上の真空管発振機を実際に使用したのは中央气象台を以て嚆矢とするもので、真空管持続電波の偉力を各方面から讃歎せられたものであった。

ついで沖縄气象台に「マルコニー」式5「キロワット」の真空管発振器を装置し、ここを中心に石垣島及び名瀬測候所を両翼として、南西方面の気象実況報及び警報を海上船舶向け通報する事となり、極東に於ける気象無線

通報網は完備するに至った。

室戸台風後9カ所の離島岬角測候所にも、無線装置を設備することとなり、西南はラサ島、南大東島、硫黄島三宅島、母島、新島、足摺岬、潮岬、室戸岬などに夫々無線を設備し中央への気象速報を計る事となった。

続いて航空機の発達に伴い、富士山頂、清水越、岩手山頂などの高山にも無線装置を設け、一方高層気象観測のため「ラジオゾンデ」を中央气象台に於て創作し各地で飛揚観測するに至った。

### 2. 座談上の御訓話と気象

i) 「グレーカラー」がよい事。余りYES, NO を判然としない方がよい。つまり「グレーカラー」で不得要領にして、要領を得るがよいねと仰せられた。今の「ロマンス・グレー」ではなく、「バックボーン」をもってからの「グレー」で結局雲を掴んでおられる事である。これは他面から見れば狸色とか古狸とかいふべきものであろう。この「グレーカラー」には大部なやまされたり又得した人もあるが段々年をとり成長してくると結局「グレー」になり言質を掴まれぬようになるのが本統だと感ぜられる。これは英雄豪傑は喜怒哀楽を色に表見さずとか大賢愚の如しとか云う古言にも通ずるものがあるが、さて實際上これが適格応用は各人の工夫を俟つべきものかと思う。

ii) 人に「なめられない」様に心得ねばならぬ事。これも結局自慎み精進知慧を以て人にあなどられぬ様にする事になる。

iii) 話して見なければ判らぬ。奥歯に物がはさまる気持はよくない、話して見ればお互判る事があるものだと話された。

これは「往かば救われん」とか、「独り断ずべからず。衆とともに弁ずれば、辞則ち理を得む」との聖典にかようなものがあると思う。

iv) 大親行者であらせられた。温情、ユーモラス、勉強家、庶民的大家族主義者であらせられた事は己に定評のある処であるが、一面大親行者であられたと思われる。夫人が話されたことであるが在布佐の御老母から時々色々家の模様替とか何にかの事で入費のかかる事を申しこされるので、夫人が先生に何うと老人のおもちゃと思って送ってやれと仰せられたので夫人は二の句も出さず心よく仕えたとの事であった。次に外来者が气象台に来てよく聞くことであるが、「气象台へ来るとどうも役所らしくないですね、皆が家族的でなごやかで、打とけて居られ他所の様な重苦しい処が感ぜられない」と、これも矢張先生が庶民的であって総てに対して無門無窓的で少しも辺幅を飾られなかった高德の然らしむる処に由るものと思われる。

以上色々書き添えたが先生はどの方面から観ても又とない高德の偉人であられた。今は親しく御声咳に接し得ない事は心惜しき限りなるも、先生の残されし業績と遺訓に後続者は又となき指針を得て邁進せられなば又幸ではないかと大に頌徳に値すべきものと存ぜられる。

\* 当日お話はなかったが、後で原稿を頂いたのでここに載せた（編集部）